

令和6年度 第2回豊橋市総合教育会議議事録要録

令和6年8月26日 開 催

豊橋市教育委員会

第2回 総合教育会議	
日時	令和6年8月26日(月) 午後3時00分～4時15分
場所	市役所東館4階 政策会議室
構成員	浅井 由崇 市長 内浦 有美 教育委員(欠席) 中島 美奈子 教育委員 山西 正泰 教育長 渡辺 嘉郎 教育委員 西島 豊 教育委員
事務局	杉浦 康夫 副市長 伴 健太郎 財政課長 鈴木 秀典 学校教育課長 石川 和志 教育部長 鈴木 大介 教育政策課長 加藤 友治 教育会館長 ほか 6名
その他	傍聴人 5名

議事日程

協議事項

- 第2期とよはし版GIGAスクール構想～令和の日本型学校教育の推進に向けて～
・とよはし版GIGAスクール構想の成果・課題と方向性について

その他

- 今後の協議事項について

連絡事項

次回開催日程 令和6年11月20日(水) 14:00～

(教育部長)

ただいまから、令和6年度第2回豊橋市総合教育会議を開催させていただきます。お手元の次第に沿って進めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

本日の協議事項は、「第2期とよはし版G I G Aスクール構想」についてでございます。それでは、資料1を事務局から説明してください。

協議事項

1 第2期とよはし版G I G Aスクール構想について

■学校教育課指導主事 協議事項について資料説明

(教育部長)

それでは、説明に対する皆さまのご意見などをお聞かせいただければと思います。

(渡辺委員)

児童生徒がタブレットを家庭でどのくらい活用しているかは分かるのでしょうか。

(指導主事)

タブレットに搭載されている機能の一つであるA Iドリルについては、教員は子どもたちがどれだけ使用しているかを確認することができます。教育委員会としても確認することができます。

(渡辺委員)

どのくらい使われているのですか。

(指導主事)

夏休みは多くの学校でタブレットを持ち帰っていますが、毎日使っていないと思います。

(渡辺委員)

活用している子どもとしていない子どもの割合を把握し、活用が少ない子どもへのアプローチを考えなければいけないと思います。また、自発的に進められる子どもについては、より高いレベルのものに取り組めるようにしておく必要があると思います。

中学校では授業時間内の活用が少ないと説明がありましたが、ソフトウェアの問題もあると思います。豊橋市独自のものを作るのは難しいかと思うので、良いものを探して使っていく必要があると思います。授業を観させていただいたところ、今のところうまく使えているという感じではなく、仕方なく使っているという印象でした。

(中島委員)

G I G Aスクールを保幼小の接続の観点ではどのように考えているのでしょうか。

(指導主事)

幼稚園や小学校低学年の段階では、タブレットも使いますが、体験を主とした活動が重視されています。打ち込みについては、3年生でローマ字を習うところが多いので、タブレットに手書きで入力できるように対応しています。低学年では、生活科で体験したことを写真や動画に残すような使い方が多く見られます。

(中島委員)

保幼小の滑らかな接続のために、学校側から子どもたちが楽しく端末を使えるような活用方法について提案があるといいと思います。

また、子どもたちの話を聞いているとテレビとタブレットを同時に使う際に、時間がかかってしまう、テレビのサイズが小さいという課題があるように思います。

今はタブレットと紙の教科書が併用されているので、通学時の荷物の重さの面も気になります。教科書がタブレットへと移行していくことはあるのでしょうか。

(指導主事)

デジタル教科書については、英語は全ての学年で、算数・数学は半数の学校で学習者用として国から配布されています。市としては教員用として各教科配布していますが、学習者用までを市の予算で配布しようとする膨大なお金がかかってしまうため、国から配布されるようになっていくと思っています。

(教育会館長)

これからデジタル教科書が増えていけば、家でもクラウド上にあるデジタル教科書をタブレットを通して見ることができるため、学校に教科書を置いていくことができ、ランドセルを軽くできると思います。なお、国はすべてデジタル教科書でいいという方針を示していないので、紙の教科書はそのまま残るのではないかと思います。

保幼小の接続については、使用する中で使い方を覚えていけるようなソフトを入れることで、不慣れな子どもたちのストレス軽減をできたらと考えています。

また、低学年ほどA Iドリルの効果は高いと感じています。

(中島委員)

保護者や子どもたちの意見を集めることもしているのでしょうか。

(教育会館長)

学校評価の項目に入れている学校が多いので、各学校ではまとめているが、それを教育委員会としてまとめることはしていません。

(浅井市長)

子どもの意見を聞く機会はあるのでしょうか。

(教育会館長)

子どもも同様に学校評価のアンケートに回答するのでその中から把握をしています。

(西島委員)

資料の中で、Windows が壊れやすくて iPad に移行するという説明がありましたが、約4%というWindowsの故障率は高すぎると思うので、故障の原因を把握する必要があるのではないのでしょうか。また、ICTを取り入れるにあたっては情報が伴うため、セキュリティの面も考えなければならないと思います。

また、現在不足しているICT支援員の業務内容はどんな範囲なのでしょうか。

(指導主事)

国としては授業のサポートまでを範囲と考えています。例えば、現在教職員が行っているソフトの年度更新なども含めてICT支援員に任せるという方針です。

(西島委員)

最終的にはICTの全体構想を作り、構造を改革して、そこに授業を組み込んでいく必要があるのではないのでしょうか。経験のある教員ほど変えることに消極的になりがちなので、若手から変えていくことが大事だと思います。ICT支援員がいなくても教員が自分たちでサポートをしていける体制を整えたほうがいいのではないのでしょうか。

デジタルになったからといって子どもたちが自動的に勉強をし始めるわけではないので、宿題や勉強が苦手な子どもたちが家でも学びたいと思える仕組みを作ることが必要だと思います。

(渡辺委員)

デジタルだけで授業ができるというモデルケースはあるのでしょうか。

(指導主事)

国としてもデジタル中心に移行しようとしていて、春日井市がその代表格としてタブレットを主とした授業を行っています。豊橋市でも、それを参考に一部取り入れようとしています。

(渡辺委員)

一部ではなく完全に転換しなければいけないのではないのでしょうか。

(西島委員)

校務DX計画について、教員が必ずしもやらなくてもよいことをDX化で削減し、空いた時間を教員の本分にあてることで多忙化解消になるのではないのでしょうか。また、多忙は感覚的なものですが、数値として結果を示すことで教員のモチベーションアップや待遇の改善につながり、結果として子どもたちにも還元されると思います。

(教育会館長)

現に、子どもたちが書いた授業のまとめを毎時間座席表に書き写していた教員が、授業支援ソフトを使うことで子どもたちが打ち込んだものがそのまま画面に表示されるようになり、書き写す時間が大幅に減ったという例もあります。

(浅井市長)

そういった機能は、教員全員が使いこなせるわけではないですよね。

(教育会館長)

教育委員会の方でも研修はしていますが、まだまだ足りていないと感じています。

(浅井市長)

若い教員の方が得意などの傾向はあるのでしょうか。

(学校教育課長)

最終的には個人の特質ですが、年代によって差は出ると思います。

(浅井市長)

資料の中で、教材作成がICT支援員の仕事だと説明がありましたが、教員の授業準備の一環ではないのですか。

(教育会館長)

教材作成が教員の授業づくりの一環という認識は合っています。ここでいう教材作成とは、例えば調べ学習のリンクを作るような作業のことです。授業で使うプリントを作るようなことは教員の業務だと考えています。

(浅井市長)

プリントの中身を考えるのはもちろん教員がいいと思うが、その後のことは支援員がやればいいのかではないでしょうか。

(中島委員)

教員が子どもと向き合う時の意識の改革にもつながりそうだと思います。いきなりICTに対応せざるを得なくなり、教員としての在り方も変わってくるかと思いますが、その中でも教員がやりがいを感じられるといいと思います。

(浅井市長)

知識をつけるだけなら教員が授業をするより優れているソフトが出てくるかもしれませんが、教員は人として子どもたちを導くなどの仕事にしっかり取り組んでいくことが重要だと思います。

子どもが興味を持って取り組めるようなソフトがいろいろ開発されていると思いますが、それはどのように導入されるのですか。

(教育会館長)

出ているソフトの中から、コストも考慮しながら良いものを選んでいきます。

(浅井市長)

良いソフトが出てくれば、教員は専門的なことに専念して、事務的なことは事務に任せるというように、教員の仕事も良い方向に変わっていくと思うので、そういうところにお金を使っていくべきだと思います。

(学校教育課長)

これまでも様々なソフトが出ていて、いろいろな情報を取り入れながら豊橋の学べき方向性と照らし合わせて、コストも考慮しながらより良いものを選んでいきます。

(中島委員)

そもそも学校は何をやる場所なのかが問い直されていると思います。

(浅井市長)

知識はソフトなどで取り入れて、それを使って学校ではディベートをするような授業にしていくべきだと思います。

(山西教育長)

一斉教授の見直しが求められている中で、タブレットを使った個別最適な学習はもちろん重要ですが、生活科や総合学習など体験が重視される学びにも注力していく必要があると思います。

(渡辺委員)

国がG I G Aスクール構想を打ち出した際に、学習指導要領は変わりましたか。

(山西教育長)

現状の学習指導要領は、国の第1期G I G Aスクール構想が打ち出された令和元年より以前の平成29年に告示されているため、変更されていません。

(教育会館長)

現状の学習指導要領のすべての教科の中に、I C T機器の活用を推進する文言が記載されています。なお、一人一台タブレットの支給は、現学習指導要領告示後、文部科学省からトップダウンで進んだ取り組みです。

(渡辺委員)

どうしても学習指導要領に縛られる部分があると感じます。この体制を変えなければ、G I G Aスクール構想を劇的に進めることができないと思いました。

(教育会館長)

文部科学省の有識者会議に参加されている上智大学の奈須教授がおっしゃっていたのは、学習指導要領は三つの資質・能力でまとめられており、「知識」・「技能」については、I C Tを使ったタブレットや動画で十分補うことができますが、「思考力・判断力・学びに向かう力等」は、従来の教育の形を維持しながら指導する必要があるとのこと。

しかし、入学試験もあるため、知識・技能をつけることを優先する教員もいます。そういった意識も大きく変えていく必要を感じています。

(学校教育課長)

保護者を対象に、学校教育に求めるものはなにかというアンケートを行ったところ、体験を求める意見が一番多い結果でした。学校現場において、何が必要な体験なのか見極めないといけないと感じています。

(浅井市長)

受験勉強に対する適切な対応を求める声もありますか。

(学校教育課長)

だんだん量は減っていきます。

(浅井市長)

生きる力、学ぶ力など、人として必要な力を身に着けるのが教育だと思っています。しかし、受験があるため、知識をつけるための教育を、ある程度やらざるを得ない状況になり、保護者からもこういった教育に対する一定の要望があると思います。知識を学ぶことについてはI C Tをさらに活用して対応し、それ以外の部分については生の体験等を取り入れ、バランスよく教育していくことが重要だと思います。

豊橋の小中学校を出た子たちは、思いやりがある、しっかりしているなどといわれることが理想だと思っています。そうなるために、I C Tをどう活用するかを考える必要があります。人づくり像や教育の在り方の全体像の中でそれぞれの取り組みがどういう位置づけかを理解しないと方向性がおかしくなると思うので、考えながら進めてほしいと思います。

(中島委員)

学校での体験というのは、教育をするための方法であってゴールではないと改めて感じました。

高校生の子たちが体験学習によって、学習意欲が向上した事例がありました。学年が進むにつれて体験学習が減る傾向があると感じますが、逆に体験学習の必要性が増していくと感じています。

(教育部長)

ほかに何かありますか。それでは、本日の会議の総括を市長にお願いしたいと思います。

(浅井市長)

本日の協議事項は「第2期とよはし版G I G Aスクール構想について」でした。豊橋市の教育の方向性や学校の役割、またどういう人材を育てるのかを整理したうえで、I C TやG I G Aスクール等の取組みが、どういった場面でどういった役割を果たすべきなのか。それに加えて、学校における様々な体験活動や総合学習などを通してコミュニケーション能力や議論する能力の向上など、トータルで豊橋の子どもたちを育てるという方向性を明確に出していくことが非常に大事だと感じました。貴重な意見をありがとうございました。

連絡事項

- ・次回開催日程 令和6年11月20日(水) 14:00～

(教育部長)

以上で、令和6年度第2回豊橋市総合教育会議を終了します。ありがとうございました。